

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（一九）

第三三則 三聖金鱗

〔示衆〕

衆に示して云く、強に逢うてはすはわち弱、柔に逢うてはすなわち剛。両硬、相い撃たば、かならず一傷あらん。しばらく道え、いかんが廻互し去らん。

〔本則〕

挙す、三聖、雪峰に問う、網を透る金鱗は、未審何をもつて食となす。「綸を垂るることを待たずして、自ら鉤に上る。」峰云く、汝が網を出で来たるを待つて、汝に向つて道わん。「人に逢うては、しばらく三分の話を説せ。」聖云く、一千五百人の善知識、話頭もまた識らず。「靈山の授記も、また今日に似かじ。」峰云く、老僧、住持の事繁し。〔脳後に腮を見る。〕



曹洞宗門では、住職になるための階程の一つに、首座法戦式という問答を中心とした儀式があります。この儀式のさ中に首座という役職の若い僧が本則を大声で唱え、ついで弁事という役のヒナ僧が頌を唱えて問答が始まります。この本則と頌が『従容録』の中から選ばれますが、第二則「達磨廓然」について多いのが今回の「三聖金鱗」です。わたくしも昔、高輪泉岳寺で首座をつとめた法戦式のとくと、当山で結制を修行したとき、いずれもこの「三聖金鱗」をとりあげただけに、たいへん親しみ深い一則です。

さて、三聖とは唐代の三聖慧然のこと、臨済義玄の法嗣です。第一三則の「臨済瞎驢」にも登場しますが、今回の「三聖金鱗」は雪峰義存との機縁です。三聖は臨済から大法を受けてから、仰山・香巖・徳山などの禅哲を各地にたずねたのち、遠く閩国（福建省）の雪峰に参じました。雪峰については第一六回の「雪峰看蛇」でご紹介したとおり、唐末以後は江南で禅の第一人者とされた禅匠です。

まず、万松和尚の「示衆」は、おおよそつぎのようなことをいっています。「人との応対に必要な軟硬自在の妙用は、いったいどうしたらできるであろうか」と。大切な事です

ね。じつは、この大切なことのお手本が三聖と雪峰による「本則」によって示されているので、万松はこういつているのです。なお、廻互とはお互いに深く関係しあうことをいいます。

さあ、「本則」をみましょう。

三聖「網にかからない大魚にはどんなエサを食わせますか。」雪峰「君が網を食い破ってきたら、それに答えてあげよう。」三聖「一千五百人の学生を指導する大先生にしては、仏法の話の仕方をご存知ない。」雪峰「わしは住持の仕事が忙しいんでな。」

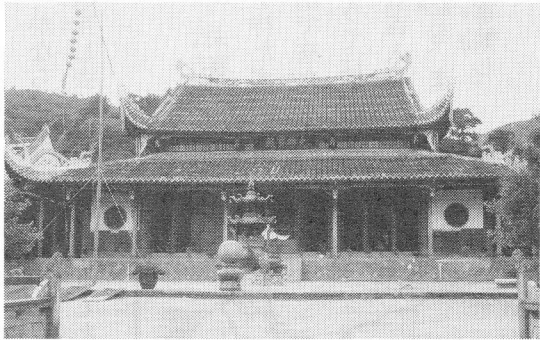
臨済門下でその人ありと知られた三聖、その三聖が全身をあげての肉迫です。どんな網にもかからぬ大魚とは、すでに悟りをえている三聖のこと。全身これギラギラした金鱗となって、雪峰にあなたならではのエサを与えよ、と鼻息あらくせまったのです。だが万松のコメントは厳しい。三聖はみずから雪峰のツリバリにかかってしまったのだ、といっています。

なるほど、雪峰は「ワシの網を食い破ってきたら、エサをあげよう」とみごとに受け流した。つまり、君はまだワシの網を透つてはいない、ワシのところの仏法は手ごわいぞ、今ここでそれを破つて

みな、というニュアンスです。万松のコメントがまた面白い。「大切な話しは三割もしておけばいいのだ」と、雪峰がやんわりと受け流した態度を讀んでいます。

ところが、三聖も負けてはいません。千五百人もの修行僧を指導している有名な善知識なのに、先生には私がすでに網を透りこえてもなおギリギリの仏法を究めようとしているのがわからんのですかとすさまじいばかりの気鋒で迫った。万松もさすがに「釈尊による成仏の予言も及ばぬほどのすげれた勢いだ」と、ほめ言葉のコメントです。たしかに、真剣な求道心はどうつくしいものはありません。なお、原文の「靈山授記」の語は、やはり雪峰に対して玄沙が用い、雪峰をたじろがしています。

とまれ、それでも雪峰は、住持の仕事が多忙でなあと、どこ吹く風とおどろきます。万松がコメントする「脳後（ほんご）に腮（はな）」とは、頭のうしろからホホ骨（ほほほね）の見えるのは悪人の相で油断できぬ、つまり雪峰は油断のならぬ大禅匠だという賛辞なのです。この雪峰の柳に風という態度は、ちょうど「示衆」にあった「強に逢うては弱」そのものですね。



雪峰山崇聖寺の大雄宝殿

さて、この則は右のとおり、雪峰さんが学道者を指導する際の軟硬自在な力量を発揮した公案として、すぐれた禅者ならではのこのころの鑑とされています。

こんな雪峰のころについて考えてみますと、指導者として自然にそなわった面もあるでしょうが、おそらくは長い修行によってつちかわれた全人格的な特性とみるべきでありましょう。それは、日常経験の中での心の鍛練が深かったからではないでしょうか。

道元禅師は、人に接するとき他人の短所をいたずらに非難などせず、かえっておのれの短所欠点を

反省すべき道理を『典座教訓』で説かれています。人を非難する前に自己をみつめ直すのは、常に謙虚でおごらぬことです。禅師はこの著述の中で、入宋当時に阿育王山の老典座の誠実さとひたむきな努力の態度に心うたれ、みずからを強く反省して教えを乞うたことを感慨こめてのべています。

ふりかえって、わたくしなどは自我意識が強いために自省の念が薄く、これまでにどれだけ人さまを傷つけてきたことか、年とともにに忸怩たる思いにかられます。

ただし、もう三十七年も昔の夏、北アの穂高で二つの台風に襲われ、一二日間の悪戦苦闘の末に命からがら下山したことがあります。この時、穂高小屋の今田重太郎さんから、山に逆らつてはダメ、従順になれと諄諄と諭されたのを忘れることができません。大自然の生命の前には、小さなエゴなどは吹きとび、粗率や剛気さ転じて慎重従順になれるのです。以後いつもそんな自覚と自省を与えてくれる山は、まさに神さまであり、今田さんの言葉は神の声でした。

大自然に接するような心で人に応対できれば、雪峰さんや道元禅師の柔軟な心と異なりません。それはまた坐禅の心でもあります。



二高僧（第1図）梁楷筆 南宋13世紀 上海博物館蔵

二祖慧可大師の耳（その二）

—雪舟筆「慧可断臂図」雑感—

松戸市 小畑 節朗

さて、この「慧可断臂図」は他の道釈画や、禅機図と趣を異にする点として、まず一つとして「賛」がないことである。第二として二人の人物はいづれも横を向いていることである。

賛のないことは、この縦二米近く、横一米十センチ強の紙に描かれた画面には賛を入れる余白は全くない。しかも賛を俊拒した気迫と緊張感に画面全体が包まれている。祖師の行実や禅機に対して賛者が所信を述べるという絵、たとえば如拙の「瓢鮎図」などとは異質なのである。

横向きの構図は類例があるのであるうか。従来は類品を見出し難たい。又同時代と前代にも同様ということであつた。

しかし、一九九三年六月東博で開催された「上海博物館展」に出品された南宋の画家梁楷筆「二高僧図」第一図に大変似ているのである。異なる点は画の主題が、初祖達磨大師と二祖との「景德伝燈録」で有名な「安心問答」であることであるが、初祖が面壁して枯

木が林立している。後で二祖が問いかけている。無論二人の人物はいづれも横向きである。絹本着色で初祖は赤い衣をまとい二祖は青色の袈裟を着している。左側に絵巻の詞書のように（湊信幸氏は題賛の語を用いている）右の「伝燈録」が楷書で記されている。画の中の賛ではなく、別紙に全く「伝燈録」をそのまま書いているといつてよい。

素人の印象批評であるが、雪舟以前の時代の優れた類品として考えるべきではなからうか。

この横向きの構図についての解説は、内山かおる氏の「雪舟筆「慧可断臂図」をめぐって」（『日本美術の水脈』）に詳しいので一部を紹介する。

「達磨の坐す地面と、覆いかぶさるような懸崖と、行きどまりを示す奥の岩盤の呼应関係が緊密で息づまるような空間が作り出されている。」と言及し、又この構図に類似している、伝聞次平筆「慧可断臂図」（米國クリーブランド美術館蔵）と対比しつつ。

「主対象がいかなるモチーフであつてもそれを取り込んで作画する利便性のある構図形式でありすなわち、クリーブランド美術館本「慧可断臂図」はその構図が主題内容の側からの強い要請により作り出されたものとはいいたいのである。とすれば、雪舟画の構図、すなわち閉ざされた空間の造成の源泉は他の作品、作域に求める必要が生じてくるであろう。」

として梁楷筆「出山釈迦図」（重文・東山御物）に求めて論述されておられる。論述時には多分内山氏は「二高僧図」を見ておられないと思われるので、その慧眼には大いに敬服した次第である。

雪舟はこの梁楷の画を見たのであろうか、などと考えるのは夢想にしか過ぎないが、「伝燈録」の主題で（この場合断臂か安心問答かで）この構図に類似したものは中国の禅院では一般的主題として流布していたのではなからうか。

（つづく）

龍泉院の「時」

千葉市 寺田 哲朗

本堂の床の間に旧龍泉院の主柱の一部が安置されています。

ここには、鎌倉時代と伺つてい
ます造営に従事した棟梁方の名前
が記されていたのを、解体の時に
椎名老師が発見されたものである
ことを、いつかの老師の提唱の折
にお聞きしたと記憶しております。
ここに名を連ねた大工さん達は

後世に名前を残したいとは思わず
自分の造った建物に、火災などに
逢わず永く無事であつて貰いたい
という愛着と、出来ばえに対する
職人のひそかな誇りをこめて記し
たのでしよう。
解体しなければ目に触れられる

筈のない、はめ合いの部分に発見
されたとお話しを伺い、ここで
今椎名老師と棟梁方が出逢つたの
だとお察しいたしました。
ところで、この床の間の正面で
の坐禅は、こうした想いに占めら
れそうな気がして、思わず敬遠し

てしまいます。
また、あと二〇年位後に「明珠」
が子供らによつて発見され、修行
者としての親の別の顔が知られる
のも悪くはないかと思つたりして
おります。

被災者の方々を激励

阪神・淡路大震災特集

この度の阪神・淡路大震災。被災された
方々のご苦労はいかばかりかと存じます。
ここに当参禅会会員の活動状況をご紹介
いたします。被災された方々の些かなりと
ものお力添えができますことを願つて。
ご主人の杜宅が被災されたにもかかわら

ず、ボランティア活動をされ、その中から
美しい花を発見された今泉房子さん。
またご自分の絵を提供され、「阪神震災地
救済絵画個展」を、実行された青木さん。
さらに、椎名老師のご子息、椎名宏智さ
んもボランティア活動に従事されました。

心で願つてもなかなかできないのが布施
行。誠に素晴らしい限りであります。
尚、被災された方々へのお見舞いは、皆
さまの賛同を受けて、一〇万円を贈らせて
いただきました。お届け先は現地の今泉さ
んご夫妻に委ねさせていただきました。

震災地の復興を願つて

龍泉院住職 椎名 宏雄

一月一七日早朝、厳寒のさ中に
発生した阪神・淡路大震災は、戦
後最大の大災害となりました。
何よりもまず、犠牲者五千数百
のみたまに、心からのご冥福を捧
げます。そして、被災された何百

万もの方々、中でも家を失い職を
絶たれ、今なお避難生活を余儀な
くされている数万の皆さまに對し
て、衷心よりお見舞申しあげられ
たいです。
わが参禅会の会員みなさまにも、

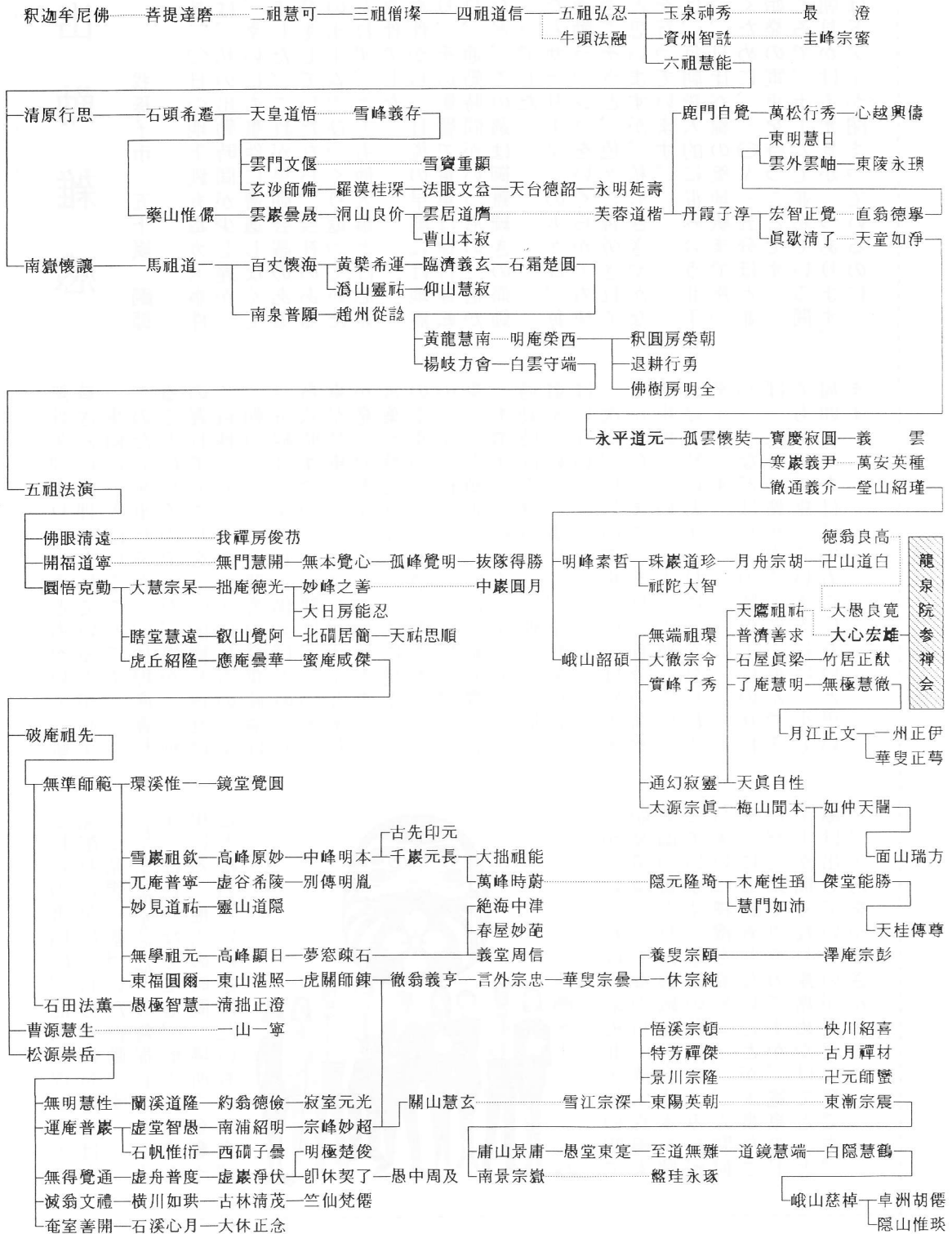
直接に罹災された今泉さんご夫妻
をはじめ、お身内や知人などのご
縁の深い方々の被災に對しまして、
心からお見舞申しあげます。
現地の方々には、想像を絶する
苦難を乗り越えて、復興に向かっ
て日夜ご辛苦なされているご様子
にて、その物心両面にわたる復興
を心からお祈りいたしたいと存じ

ます。
当参禅会では、幹事さんを勞し
て現地へ義援金をお送りしました。
これまさしく、如浄禪師が道元禪
師に示された「大悲の坐禅」の精
神にかなう浄業であります。願わ
くは、あらゆる功德が一切に廻向
されますことを。

合 掌

禪の伝燈

=インド・中国から日本へ=



出勤雑感

我孫子市 五十嵐 嗣郎

三月二〇日の地下鉄有毒ガス事件の時は、私の出勤時間が少し遅かったため、幸いにも事件に遭遇しなくて済みました。これが早朝会議のある日に発生していたなら、会社のある築地のホームでひっくり返っていたかもしれない事件でした。

また事件から三日後の早朝には地震があり、その影響で電車は徐行運転となり、通勤時間がいつもの二倍かかるなど、この週は御難続きの通勤ラッシュでした。

ふだんサラリーマンの方々は、毎朝の通勤ラッシュをいくらかでも快適に過ごそうと、色々と苦勞されていると思いますが、私もささやかな努力を行っています。

それは、毎朝殺人的に混み合う北千住駅で、日比谷線の築地駅まで座っていくために、一〇〜一五分ほど並んで始発の電車待つことです。

ところで、ホームで並んでいる間に毎朝見かける光景が一つあります。それはドアが閉まっているのに、

無理矢理乗り込もうとがいて、駅員さんに尻押しされている人が必ず一車両に一人はいることです。

このため発車時刻が三〇秒程度遅れることになるのですが、僅か三〇秒の遅れでもこれを一〇回繰り返せば三百秒（五分）のロスになるのです。

朝のラッシュ時間帯の発車間隔は三分程度ですから、例えば七時半から八時までの三〇分間に、一〇本電車が発車できるはずが、八〜九本しか発車できないことになります。

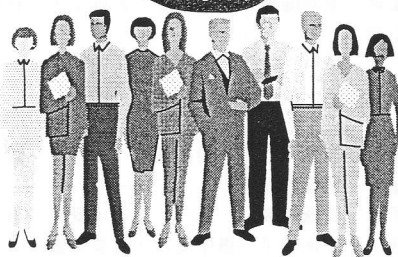
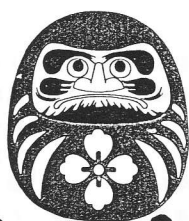
言葉を替えれば、この間に発車予定の電車が一〜二本消えたことになるのです。彼らが少しでも早い電車に乗ろうと頑張るために、結局電車を二本消すことになる（従って他人の通勤時間を遅らせる）他人の時間を盗んでいる）事には、全然気が付いてはいないのです。

次に、休日の電車の中では別の光景が見られます。それは自分の荷物を座席に置いて一人分占拠している人達で特にお年寄りに多く見られるタイプです。

バッグなどは自分の膝の上にのせれば一人分の席が空くの、混んできても平気で座っている人には、少し周囲に気を付けてもらいたいと思います。

これらの事柄は、他人や周囲への気配りに欠け、自分だけ良ければという発想に基づいた行動です。

「自未得度先度他」の菩提心をおこすまではいかなくても、他人に迷惑を掛ける、他人の時間（場所）を奪うことはお互いに避けたいものです。



かくいう私は、最近北千住の駅で始発電車を待ちながら、故大森曹玄老師の書かれた碧巖録の文庫本を読んでいます。老師の解説を読みながら大いに禅機を高め（？）、人間何モノにも執着しないことが大事なことだと頭で思うのですが、電車のドアが開くなり座席めがけてどっと駆け出しているのが現実の姿です。アア何をかなさん！

震災の町から

柏市 今泉 房子

私事ではありますが、婚姻届けを出し、新しい生活をスタートした第二の故郷ともいえるべき神戸で昨年より主人が転勤となった事を契機として、再び生活を始めたばかりの一月一七日の出来事。その日の午前五時四六分、二〇数秒間の激震で神戸は瓦礫の町と化してしまいました。

テレビに写し出される火災シーンは見覚えのある場所ばかり、唯々呆然を眺めておりました。

前日より私は柏に戻っており難をまぬがれたのですが、直ちに夫は神戸へ向いました。大阪までは新幹線。次いで大阪からは車で、三田、有馬を廻って八時間かけてようやく神戸市長田の社宅へ辿り着きました。その十日後、私も大阪から電車とバスを四回乗り継ぎ三時間かけてたどり着きました。

黒く焦げた鉄骨だけのアーケード、直接二階が地面に乗っている家々。扉が無くなり家の中のトイレも風呂も台所も…生活が見えてしまっている家。そんな間をゴミをかきわけながら、人々はリュック

クを背負い黙々と歩いているのです。皆が大切に作りあげた家や車が一瞬にして粗大ゴミと化してしまいました。

その横で「また壊れるからもう何もいらんや」とのなげやりな言葉が聞こえてきました。



瓦礫の山神戸（今泉さん撮影）

使い捨ての時代、作ったものが壊れる、まして家が壊れるということ私達は忘れてしまっていました。諸行無常、人は生まれ土に帰り物は作られ壊れるという自然の流れが、いきなり瞬時に起こったことにより人々は生きる気力を

失い、炊き出しや、物の配布に行列しておりました。

床の上に布団を敷きつめ、何の仕切りもない修学旅行の大広間の様な苛酷な避難所、寒の季節と重なり、人々はそれはそれは寒く厳しい生活を送っておりました。

それでも二ヶ月を過ぎた頃からそんな暮らしの中からも「長田が好きやねんガンバロー」の電柱の張り紙に力づけられたのか、また若いボランティア達の毎日の自転車御用聞き等のエネルギーによるものか、この土地を離れず生きる

んだ、いやそうしなければならぬという息吹を感じるようになりました。

しかし、帰る家の無い人々、壊れた家に帰れても一人暮らしをしなければならぬ老人、校庭にプレハブ教室が建てられ遊び場が無くなった児童等、他者の援助が新たに必要となるケースが出てきております。

これからは自助努力へのお手伝いが求められてくるのです。基本は、神戸の人々と同じ目線で物を見、考える事だと思います。これからも復興の度合いに応じて震災地神戸から出されるアピールに耳を傾け続けていたきたいと思えます。

ところで、まだ全国からの救援車やボランティアが沢山来られていた二月早々私の心に残る出会いがありました。それは、神戸で働いているベトナム人の避難テントの前で、バングラディッシュの国営テレビのニュースキャスター、イスラム教の神戸ボランティアマネジャー、東京からの日本人キリスト教シスター、神戸在住で寺の子息であるというボランティアコーディネーター、そして私とが偶然顔を合わせ話をする機会がありました。その時皆の心が一つに

なり、ある人が「世界で何か困った事が起きた時は、私達は皆兄弟です。力を合わせて助け合ひましょう」と言った時、一斉に拍手がわき、握手をし合いました。六人の小さなサークルが大きな地球を表しているようでした。

心のスポーツ

野田市 青木 志郎

一九九五年一月一七日午前五時四六分に発生した阪神大震災（震度七）は死者五千四百人を越す大惨事となった。

気象庁が「兵庫県南部地震」と命名した呼称を政府は二月一四日の閣議で「阪神・淡路大震災」に変えた。

一月二十一日の夜、日増しに募る「何かしなくてはとの思い」を妻に打ち明け救済絵画個展の準備が始まった。

年賀状を見て、今泉夫妻が神戸の長田区在住になつてゐるのに驚き、安否を知る為何箇所かにダイヤルして、無事の報を聞いた。

個展準備中、プラン・ドウ・シーが思うように進行せず何度も坐禅で気を沈めた。今泉氏の情報に

よると、倒壊した家はゴミの山でしかなく、日を追うごとに貧富の差が出てきてゐるとの事、一月二五日に生活情報かわら版「デイリーニーズ」が出版され被災者に配られてゐるという。

夫婦も来場され会場が華やいだ。野田市長の根本崇さんが、座生沼（野田）の作品を見て緑シジミの生息地はそのままにすると話されていた。野田消防長の倉持さんや多くの方に協力頂いた事に感謝しなければならぬ。

被災者救済の個展を開いた青木さん



会館は、民風を作興して、円満な社会を実現するとの目的で事業運営が成されてゐる所である。

新聞の全国紙五社、地方紙一社、タウン紙四社、ラジオ一社の協力が得られたことも良かった。今泉夫妻に加え、「明珠」編集長の杉浦

被災して死んでも大変、生き残つても大変、大震災を風化させないのはどうすれば良いのかを考える時、今からでも遅くはない日常に心のスポーツ、坐禅を取り入れてはと思うのである。

合 掌

ボランティアの

体験から

杉並区 椎名 宏智

「ここはゴミ捨て場ではありません」

倒壊した家屋の前にマジックで大書きされた板が転がっている。ゴミの処分に困った者が瓦礫と化した他人の家の上にゴミを捨てにくるのだ。

震災から二ヶ月を経た三月一八日、私は神戸市長田区で活動が続ける学生ボランティアに合流した。現地入りしてまず感じたことは、「震災後かなりの時間が経過したというのに、なぜこれほど崩れた家が残っているのだろう」という素朴な疑問であった。崩れた壁、折れ曲がった柱、とうてい住めそうにない傾いた家、そういったものがどこへ行っても目に飛び込んできた。

なぜ解体し、撤去しないのかという疑問のこたえはすぐに見つかった。要するに、瓦礫やゴミの捨て場がないのだ。主な撤去作業が鉄道や道路など公共性の高い物から順に行われているため、個人の家の解体などは後手に回されてし

まっているのだという。

ゴミの問題と同時に、私は神戸の空気の悪さを痛感した。快晴だというのに輪郭のはっきりしない太陽がぼんやりと輝き、水雑巾で拭いた机が五分もしないうちに埃を被るという状況は耐え難かった。

三月一九日に神戸地球環境研究会の会合に出たボランティアの報告に私達は青くなった。長田区は大

気中のアスベスト量が、環境基準の二五倍から五百倍も観測されたというのだ。翌日から私達は住民にマスクの重要性を説いて回ったが、なかなか徹底されず気を揉んだ。住民の多くはアスベスト公害に対する認識が浅く、ただでさえ心労がかさむ生活にマスクは相当抵抗があるようであった。私が寝泊まりした長田区立室内

小学校は、五階建ての校舎の約半分が被災住民の生活の場として使われており、約二百人が今なお避難している。だが、長田地区は典型的な同和問題が残る地域であるため、住民間の確執が激しく、救援物資の分配に手落ちがあったりすると不公平だとボランティアはよく食ってかかられた。

神戸での八日間のボランティア体験は、私にとって貴重な財産となった。それまでボランティアは献身的な奉仕の精神がなければできないと勝手に思い込んでしまっていたが、神戸での経験は、そんな私の誤解をふっ切ってくれた。「なんだ簡単なことじゃないか」それが今の率直な感想だ。自分にもできるといふ自信を、私はどうやら神戸からもらったようだ。

阪神・淡路大震災で被災された皆さまお体に十分気をつけられて頑張ってください！

〈第一二回〉成道会円成す

平成六年二月五日厳修

釈尊が仏陀世尊になられた事を記念する報恩の成道会が、椎名老師のお導きの基に、二〇名の会員が参集して如法に厳修されました。

今成道会も六人の会員の配役により、報恩坐禅、成道会、法話、点心和差定に従って肅々と進行。

成道会の後、椎名老師より二〇年間坐禅修行を継続されてこられた森岡さんに対し、労いのお言葉と共に御自らの書が贈られました。

以下、椎名老師の法話要旨。
人間は死ぬまで自分自身また自

分の心が解らない。宗教に関心を持つことにより自己が何であるかを知ることにつながる。

絶対主体の確立を教え通し、臨済在家で活躍された久松信一先生の公案のご垂示。「どうしようもない時、どうする」。これは頭で考えるのではなく体でぶつかなければダメ。やはり普段行をしているかどうかが大事。また疑いを持つことも大事。絶対に対し疑いを持ち、それを突破した時に悟る。

森岡さんの修行姿勢が然り。森



第12回成道会記念撮影

岡さんは私に二〇年前に「玉は磨けば光るがダメな素材ではダメでしょうか」、また十一月の座談会でも「ダメな人間はもっと多く坐らないとダメなのでは」との同様な質問をされた。これは自分に対し常に厳しい反省がある証拠。

岡潔先生の自我を押え本来の自己即ち真我が表れた時慈悲心が現出する論を引用されてのご垂示。

最後に、人間は腹を立てることが多いが、相手を考え、真の自己を出し、自我をコントロールしなければ幸せになれない。私達は未熟故に死ぬまで坐禅を続けなければならぬと締め括られました。心に深く染みるご教授只管感謝。

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）
- 一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅
経行鐘 二声 経行
放禅鐘 一声 放禅
- 一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く
講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師
平成六年度七月より「古鏡」の巻を提唱
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わずなたでも参加できます。
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は二月四日）
 釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（中は座談の司会者）

平成六年

・一〇月二三日 一九名
（沢村 国勝氏）

・十一月二七日 二〇名
（高野千代子氏）

・第一二回成道会
二月五日 二〇名

成道会幹事 寺田 哲朗氏
安本小太郎氏

写真撮影 五十嵐嗣郎氏
導 師 椎名宏雄老師

・十二月二五日 一八名
（杉浦 上太郎）

・一月二二日 一四名
（添田 昌弘氏）

・新年会
二月一二日 一六名

（於・芳野屋）
二月二六日 二一名

（加藤 健之氏）
三月二六日 一八日

（寺田 哲朗氏）

▼前号は、各位の絶大なる協力のお陰様で「明珠発刊一〇周年記念号」を発刊、また初心の出発。今年初年から波乱の幕開け。一月は阪神・淡路大震災、三月は

地下鉄サリン事件、猛烈円高。

▼世情不安高まる現代。政治、経済、そして人心の不安感増大。

政治、経済問題はとやかく言うまい。唯人心の不安は一人一人が自力で解決できる問題。今まさに自分の生き方即ち、原点を見直す時。坐禅修行がよい。

▼より多くの人が、坐禅修行発願の動機付けとなる様な自分自身の日常行でなければならぬことを痛感。今こそ正念場と思う。

▼十二月三日、宗門の年中行事の慈善托鉢に、椎名老師は今年も寒風の中ご参加。（於柏駅前）

▼一二月の例会後、恒例となった龍泉院スス払い作務奉仕。多くの会員によって、日頃お世話になっている本堂、回廊、大悲殿等が掃き清められました。

▼来年は当参禅会誕生二五周年。新年会にて「禅の源を訪ねる中国旅行」の提案あり。乞ひ意見。

▼一泊参禅会は六月一、二、三日。袋井市にある徳川家康公所縁の可睡齋にて実施を決定。

▼今年の年番幹事に、五十嵐嗣郎氏と井之輪進氏が就任されました。今年一年どうぞよろしく。

また昨年お務め下さいました寺田哲朗氏、安本小太郎氏に深感謝。（杉風記）